

## 平成 30 年度 第 3 回三重県経営戦略会議発言要旨

日 時：平成 31 年 2 月 7 日（木）14:00～16:00

場 所：TKP 赤坂駅カンファレンスセンター 1 4 B

出席者：榊原委員、白波瀬委員、武田委員、田中委員、  
西村委員、速水委員（座長）、藤沢委員、藤波委員、  
増田委員、松本委員、宮崎委員、鈴木知事

### はじめに

#### 鈴木知事：

- ・今年度最後、平成最後の三重県経営戦略会議に委員全員にお集まりいただき感謝申し上げます。
- ・速水座長が平成 30 年農林水産祭で天皇杯を受賞された。三重県だけでなく、日本の林業全体に様々な影響を与えていただいております、そういう方に座長を務めていただいていることに大変感謝申し上げます。
- ・平成最後の正月でもあり、伊勢神宮の参拝客数も大変増えた。三が日は 5 年ぶりに 50 万人を突破し、1 月全体も 170 万人を超えた。そういう時はチャンスでもあり、しっかりと三重県の PR などもしなければならぬ。ちなみに、都道府県の外郭団体、観光協会や観光連盟がやっているインスタグラムのフォロワー数が、三重県は全国 1 位となった。そういう魅力の発信とともに、この三重県に暮らす方々が、多様性に寛容に、包容力を持って共生していく社会を作っていかなければならない。前回の会議で、改正入管難民法をふまえた外国人との共生、あるいは障がい者や高齢者の方々との共生についてご意見を賜ったが、今回はその「共生社会」に絞って皆さんにご議論いただきたい。

### 議題 地域共生社会の実現に向けた県の役割

#### 宮崎委員：

- ・今回のテーマである、障がい者、高齢者、外国人との共生は、行政の問題であるのは当然だが、我々企業家にも喫緊の問題だ。この問題をきちんと解決していかないと、これからの企業活動は上手くいかない。
- ・当社では定年を 60 歳から 65 歳まで延長している。65 歳はもの凄く元気であり、この人達にどうにか活躍してもらいたい。当社では、65 歳以上で働く場合には、この収入なら、年金を満額受給できるというものを提示している。できれば年金を満額受給して、会社の役にも立ちたいという人が何人かいらっしやるからだ。今、中小企業は人手が集まりにくく、こうした高齢者の力を借

りて勤務してもらうための制度設計に入っている。

- 三重県では「とこわか健康マイレージ制度」というのをやっているが、実は最近、私はずっとフィットビットをしている。これにより、歩数、消費カロリー、有酸素運動の時間などが測定され、スマホにデータが来る。ある生命保険会社に勧められて試作品を使っているが、これによって保険料率が変わる時代になるようだ。これは「とこわか健康マイレージ制度」と若干オーバーラップしているのではないか。
- 三重県の産業振興アドバイザーボードの会議で寺島実郎さんがふるさと納税について、「もう、ものを送るのを止めたらどうか」と言われた。三重県に住んでいる人は三重県に納税すれば、それが全部、高齢者に行くから良いが、都会に出た人も故郷の親を何とかケアしたいと思っている。都会で成功している高額納税者は、なかなか故郷にダイレクトに還元できない。そういうシステムを何処かが先にやったら良いのではないか。出て行く人を止めるのではなく、出て行った人から税金を還流させるシステムを県なり市が考えると非常にユニークだ。
- 外国人については、三重県は北勢地域に外国人が多い。特に四日市市の笹川は殆ど外国人の団地になっている。昔は日本人が外国人に日本語を教えていたが、最近はサッカーを教えるクラブやポルトガル料理を教える教室など、外国人が日本人に文化などを教えるシステムができつつある。一方的にこちらが教えるのではなく、向こうから教えてもらえると良いのではないか。
- これまで外国人問題は、その場しのぎの戦術ばかりで、ある意味パッチワークみたいなシステムだった。これからは、きちんとした議論をしていかなければならない。
- 外国人に対しては、言葉以外にゴミの出し方など生活習慣をきっちり教えることも必要だ。これは三重県だけに限った問題ではないと思うが、行政でそうしたシステムをお願いできないか。

#### **松本委員：**

- 今日のいくつかのテーマをみると、日本の動き、特に実働労働人口の減少をどのようにみていくかが重要だ。
- 外国人のケースで言うと、現在もJR東海本体では外国人を採用していない。関連会社で採用しているところもあるが、まだ数は少ない。それは、まだ自力で日本人を採用できる環境があるからだ。今後は外国人を採用する時が来るかもしれないが、現在は外国人には徹底した鉄道の安全についての素地がなく、実際に仕事をするのは難しいと思う。
- これから外国人が来て、その子ども達が育っていくという時代が来ると思うが、一番大事なのはその子達に日本語と日本文化を教育していくことだ。
- 現在、労働人口が足りない分野で東南アジアや南アメリカなどの外国人に来てもらっているが、法制度がきちんと認められていない中で必要性に応じて実

態が進んでいくようなことになっている。法の中で読めるところを読んで適応させ、つぎはぎしてきたため、連関性がない。そういうものをトータルとして、きちんとできるところから体系付けて、関連付けて、そして育てていくことが重要だ。その土台には日本語と日本の文化があり、そして相手の文化を認めないといけないので、交流が必要だ。小企業、大企業を問わず、早い遅いの差はあっても、必ずそういう時代が来るので、それはやらなければいけない。

- 高齢者については、三重県民意識調査で「社会で活躍できる年齢」について尋ねたところ、高齢になるほど働けるという回答が出ている。私もその年代であり、その年代の友だちも多くいるので、全くその通りだと感じる。
- また、高齢者の就業状況をみると、就業率は50代、60代から下がっている。これが仮に下がらずに平行に推移したとすると、実際の折れ線と平行の線で作られる三角形の部分が仕事をせずに漏れている人達になる。この半分が使える人であると考え、この働ける人にどういう仕事を与えるかという問題になる。そうすると1つは仕事の創設であり、もう1つはどの分野で労働力が不足しているかである。創設の方は県のほうで色々な形で対応をしているので、それを除くと、労働力が不足している仕事を分類して、分析して、分解して、その中でどういう部分の、どういう時間の、どういう場所のものを行うことができるかを男女別に考える。そして、できる範囲内、できる時間、できる場所で、という仕事を少しでも探していく。例えば、この中にも例が出ているが、老人が老人を介護するとか、あるいは年配の女性が近所の子育ての手伝いをするなどがあり、働く方も働ける時間などがあるので、それも分解していかにもマッチングするかという作業を緻密にやっていくことが必要だ。
- 余談だが、宮崎委員がしているフィットビットについては、当社の関連会社、特に夜間作業の多いところでは全員がつけており、それで健康管理をしている。

#### **増田委員：**

- 今、中小の製造業、農業などの現場、サービス業ではホテルとか現場のフロントやバックヤードが非常に人手不足だ。ここに外国人を多く入れることには大賛成だ。それに対して危惧し、反対している人達は、低賃金のまま固定化するのではないかと、生産性の向上を却って損なうのではないかと。従って、生産性向上の努力と外国人の受け入れが両立していないと、この政策は受け入れられない。生産性の向上のために、AIやロボティクスなどテクノロジーの進歩も含めてトータルで入れるということもあると思うが、是非、両立を狙う県であってほしい。
- 外国人の問題に対しての県民意識の変化に細心の注意を払う必要がある。三重県は製造業、特に自動車産業などが集積しており、これまでもかなり外国人が入ってきている地域であり、経験値はかなりある。一般論かもしれないが、最初は外国人に対して好意的に見ていた意識や地域での世論が、文化や生活習

慣の違いが見えてくると、徐々に排外的に変わってくる。

- 地域に入ってきた外国人が長くいれば良いが、製造業などでは結構頻繁に居住地が変わる。ボランティア的な人達の活動にかなり頼ってはいるが、地域では同化のための努力や、日本語教育のための努力をしている。本来は税金投入なども考える必要はあるが、市町村単位では「すぐになくなる人達に税金を入れる必要があるのか」という排外的な空気が徐々にでてきている。そのため、常に県民意識の変化に細心の注意を払った上で、排外的な空気にならないような体制を作っていくことが大事ではないか。
- 外国人の都市集中については、それを防ぐためには、最低賃金を全国一律で全部千円以上にするくらいのことをやる必要がある。どうしても、対応できない企業には、転業を考えないといけない。そうしないと、生産性の向上と言っても、低いまま固定化することになる。
- 高齢者の生き方はリンダ・グラットン「ライフシフト」で非常に注目された。100歳まで長生きするという世界は非常に好意的に受け入れられるし、長生きは望ましいと思いがちだ。しかし、三重県の意識調査を見ても「100歳まで生きることについてどう思いますか」という問いに対して、「楽しみ」と「どちらかという楽しみ」を含めても、たった15%だ。3分の2の人は不安という結果だった。深層心理では誰も自分は長生きしたいという思いはあるだろうが、皆が腹の底から本気で長生きを望んでいるかという点、色々な社会的な条件がそういう気持ちを阻んでいる。3分の2の人は不安に思っているということをスタートにして、高齢者の問題を考えていく必要がある。長生きの時代が来たから希望者には働いてもらって、自己実現するとか、あまり前のめりのことを言うと、そこに微妙な空気のズレみたいなものがある。長生きで楽しみに思うことは、家族と一緒に過ごす時間が長くなるか、自分の趣味の時間とかである。つまり、行政は楽しみ実現にはあまり関われないようなところがある。一方、健康の維持、収入の確保など心配や不安の除去は、まさに行政の役割だ。介護も、これからは認知症型の介護をどうするかが重要であり、収入も現役世代の収入と格段に差があることは織り込み済みだ。多少の収入があれば、社会的な存在感をきちんと自分で確保できる。このあたりについて、今より一歩先に行けるかというようなことを着実に考える必要がある。
- 三重県の取組みで、「介護助手制度」、「とこわか健康マイレージ制度」などは大いに進めると良い。高齢者にとって、三重県がどれだけ暮らしやすいかを丁寧に見せていく中で、こういう意識調査の空気感が変わってくるかを意識しながら、高齢者を見ていくことだ。100歳は凄く良いことだが、高齢者は必ずしもそう受け止めていないことを出発点にして考えてはどうか。

#### 藤波委員：

- 高齢者の労働と、外国人を増やしていくという話の共通するところは、ある程度労働力として期待しているということ。一方、最近実際には賃金が下落して

いるのではないかという話があるが、働く人が多くなれば賃金を押し下げるといった他世代への負の影響が出る可能性がある。国内には、働くことができるものの、働いていない人達はまだ残っており、そういった人たちを労働力として活用すること、特にロスジェネ対策が必要である。

- 現在、50歳以下の世代の所得が以前と比べて低くなっているという状況があり、こういった世代を考えながら、外国人・高齢者のことを考えていくことが必要である。現在50歳である人の40歳までの獲得賃金は9,500万円であるものの、わずか5歳下の45歳の人達は9,000万円、40歳の人には8,700万円しか稼いでいないというように、就職氷河期に社会に出てきた人々は、所得が十分得られていないことが数字として表れている。
- 非正規の中でも、不本意非正規と言われる方がおり、その中で35～54歳の働き盛りの方は、少しずつ減っているものの、今でも155万人いる。不本意非正規をうまく使いつつ、外国人との共存を考えていくことが重要だ。また、最低賃金を見直しながら、ロスジェネ世代にもしっかりと賃金を得られる社会を作っていくことも重要である。
- 外国人の共生について、三重県は、「三重県多文化共生社会づくり指針」によりしっかり策定されており、スタートも切れている。外国人を地域に馴染ませることに対して、国が地方自治体に丸投げしている部分があり、自治体によっては民間団体任せになってしまっているところも多くある。
- 日本語教育について、指針の中で「外国人住民が地域の担い手となるためには、日本社会の文化や習慣に対する理解、日本語の習得が必要です」と明記されているが、達成されているかという点、必ずしもそういう状態ではないと感じる。指針でも指摘されていることであるが、特に医療現場での多言語対応が全国で問われている。
- 共同通信が主催の地域再生大賞の選考委員をしており、今回大賞をとった「多言語センターFACIL」という兵庫県にある団体は、彼らが実践している医療通訳の手法を多くの地域に移植している。ちなみに、三重県の「ディーグリーン」という団体が大賞に準ずるような賞の奨励賞を受賞した。
- 児童の就学について、先行している浜松市では、学校を核とした新たなネットワークの形成のために「不就学児ゼロ作戦」を策定し、学校を拠点に様々な取組みを行っている。日本人・外国人双方に教育をして、外国人のコミュニティの取り込みを図っている。
- 新しい技能資格では、転職が可能となる。新しい制度なので見通せない部分はあるものの、地域に汲み取ってもらえるような仕組みづくりが必要。県の役割として重要なのは、外国人が必要な賃金を得られているかということ进行调查・勧告することである。雇用慣行についても日本人と同水準の確保ができるかどうか重要だ。
- 外国人に対して目の行き届かないところが出てくるため、困った外国人が駆け込む「駆け込み寺」のような施設・仕組みを作っていくことも必要である。

- ・高齢者について、高齢者の活躍は必然的となる。白書のデータによると、60歳以上で起業する方が増加しているため、そういった方を対象とした企業支援のようなものも必要である。高齢者のみを雇っている企業があるように、高齢者を必要としている分野・業務があるため、そういった仕事を見つけることが重要だ。もっとも、企業も低賃金ありきで考えるべきではない。地方で人手不足といった時に、今の賃金ベースを前提に人が採用できないと言っていると考えられ、より多くの給料を払えば家にいる人が働き出すのではないか。賃金を上げることは基本的な方向性としては正しく、賃金に関する調査・勧告は県の仕事として必要である。
- ・国全体の話になるが、働かないほうが得という状況を変える取組みをしてもらいたい。働きながら年金をもらっている方は所得が37万円を超えると年金が減らされていき、そういった状況が本当に良いか議論すべき。
- ・移動手段の充実を図るため、最近ボランティア運転手がバスを走らせる自家用有償旅客運送を行う自治体が増えているが、自動運転などの実現も必要だ。三重県には、コミュニティバスすら走っていないような交通不便地帯が山間部地域を中心に多くあり、高齢者も多く暮らしている。そういったエリアの後期高齢者は2030年まで増加していくことになる。家族が送り迎えをする、または週に何本かコミュニティバスが来るから良い、と考えるのではなく、ある程度自由度を持って動ける社会を作ることが高齢者自立の一つの方法である。

#### 藤沢委員：

- ・宮崎委員が仰っていたふるさと納税について、故郷の生駒市では家の掃除やお墓の掃除、人間ドック代の補助などがあり、私も活用している。
- ・藤波委員が仰った交通不便の解消には是非取り組んでいただきたい。昨日、国土交通省の審議会に出たところ、車を所有せず使いたい時だけお金を払って利用する「MaaS」の取組みを日本でもようやく始め、その中で自家用車ゼロという北欧の取組みを真似しようとしている。公共交通機関とシェアリングで全部つなげるという取組みで、三重県でも実証実験をしていけば面白いのではないか。
- ・共生というのは、誰も取り残されないということである。少数だから取り残されるマイノリティによるものの他、縦割りのすき間に落ちて取り残されるということが挙げられる。例えば、高齢者、障がい者、子どもという福祉の枠組みがあるが、ここには壁があり、高齢の障がい者や子どもの障がい者となると、間に落ちるため、全て一緒の枠としたほうが良い。石川県の支援の中に、入り口は障がい者、高齢者、子どもと別れているものの、中に入ると低い壁で一緒になっており、福祉士を全員共通で使えるものがある。高齢者が障がい者の面倒をみることで役割を感じ、高齢者が元気になっていることが起きているようだ。自治体にできることは、縦割りになっていることですき間に落ちている人がいないか、縦割りであるが壁を低くすれば生産性が上がるのではないか、

ということを考え、見直してもらいたい。

- 外国人については法改正の前から取り組んでおり、外務省の河野大臣のもとで有識者会議を立ち上げた。提言したことを今回の法案に多く盛り込んでいただけだが、入りきらなかったものがたくさんある。その中で特に問題なのが、外国人の共生において、財源がないということだ。現在も会議を続けて議論している。産業界にとって外国人を雇っていくのであれば、官民でプラットフォームやファンドなどを作るほうが良いと考える。地方に住んでいる外国人が日本に来る時、都市まで行って試験を受けないといけないが、行くだけでかなりの交通費がかかる。プラットフォームを作って会費を出してもらい、交通費を奨学金のように出す仕組みを作っていきたい。そこで、三重県にモデルケースを作ってもらえたら嬉しい。
- 増田委員から「生産性の低い分野に対して外国人を入れるのはどうなのか」という話がでたが、今回の法案にも生産性をまず高めてから入れましょうと一応はしているものの、曖昧である。三重県で外国人を採用する時は、「外国人を採用する際、生産性の向上を努力しているか」という点をチェック項目に入れるなど、独自の追加ガイドラインのようなものを出してもらいたい。また、現在受け入れ企業の管理は入管庁で行っているが、人材不足と財源不足という問題があるため、三重県で独自で管理できる仕組みを作ってもらいたい。
- 三重県に外国人をある程度定住してもらおうと考えた時に、藤波委員が仰った転職支援が不可欠であるが、在留申請をし直さないといけないため、なかなか難しい。三重県の中に外国人転職支援センターのようなものも作ってほしい。
- 新しい法案では、外国人を雇う際に正社員にすることになっているが、現在いる多くの外国人は留学生ビザで来たバイトである。学校代を払ってくるため、日本に来る時に150万円ほど借金をしてくるが、就労ビザで来れば50万円で済む。就労ビザで来るようになると、バイト要員がいなくなってしまうため、結果、日本人が皿洗いなどのバイトになることがあり得る。企業は外国人に対して副業を認めないと、日本人がバイトになりかねないため、大変心配している。
- 多文化共生についてのワークショップを昨年から外務省国際交流基金で行っており、今年のカンファレンスの開催場所を悩んでいるため、三重県が協力して下さったら有り難い。三重県が外国人労働者の共生の一番のリーダー県になり、そこから発信できたら面白い。
- 誰一人取り残さないために、ごちゃまぜの場を作ることが大切である。学校内に、外国人でポルトガル語やサッカーを教える先生や、日本の高齢者も何か教えるような、教える場を作るのが1つである。もう1つは、三重県にはプロスポーツが少ないため、県民がごちゃごちゃに集まり、みんな1つになって応援できるような場を作ること意識されてはどうか。
- 私自身もそうであるが、みんなそんなに働きたくないと思う。楽しく関わっていると、結果、働いていたという形を作るべき。故郷の生駒市では、市長が

「市民は全員サービスを受けるのではなく、サービスをする人です」と発信をして、市民が市役所の役職のようなものを持っており、広報担当や福祉担当などもしている。住民をどっちがサービスされる人かサービスする人かわからないような場づくりもやっていく必要がある。

#### 西村委員：

- ・藤沢委員から出た「すき間に落ちている」というのは確かにそうだ。行政もすき間はあるが、地域にも結構すき間ができています。三重県の南部に行くと、昔は1つの地域がだいたい500人くらいの単位でまとまりがあったが、それが崩壊している。地域共生の地域の単位を変えなければいけない。
- ・先ほど、非常に良いと思ったのは「楽しく関わっていたら、勝手にいつの間にか働いていた」というケースだ。桑名の「桑竹会」では、竹藪を自分達で基地にして、勝手に直していったら、それが竹藪の整備になって、まちがきれいになった。桑名にはたくさん竹藪があるので、それを桑名市が認めて、桑竹会のやり方を広めてまちをきれいにしていこうとなった。まさしくリタイアしていく人達が自分達の役割を市に認めてもらえたので、意気を感じてやったのだ。都市部でも、お金ではなく、役割があればやりたいという人達が結構出ている。田舎でも、そういう人が多い。お婆ちゃんが公園に座っているだけで子どもを見てくれる。それだけでも凄く良いが、そのお婆ちゃんに何か役割を与えたら、皆が意気を感じて動く。行政がしっかりと丁寧に見て、そういうやり方に頼れば良い。
- ・民の動きについて言えば、今私のところに不動産屋が2人学生として来ている。1人は、自分で空き家を買ってきて、少し直して、社会的な弱者、つまり精神障がい者に貸している。精神障がい者は入院の時は良いが、退院すると一人のケースが多い。そういう人達が住めるアパートが基本的にない。彼は看護学科の准教授だが、それを現場で悩んでいたのも、自分でやった。今20軒くらい買って、それを貸している。民の力でそういうことを上手くやれば、今の資本主義社会でもやれるやり方はある。
- ・もう1人は大手企業を辞めて不動産をやっているが、彼も空き家を買ってきて、行き場所がない低賃金な人達に安価に賃貸している。本当にボロ家を買って、自分で大工を呼び、床を貼り、水回りを直す。それだけだが、確実にお金を払ってもらえるので、今50戸くらい持っている。
- ・よく見ると、行政がやるべきことも、実は民の力を借り、仕組みを上手く作ればできるのではないかと。藤沢委員が仰ったように、丁寧に地域を歩いて行って、気付いてことを吸い上げて行って、もし市町をまたいだ共通項がある時には、県がそれを制度化するような連携も必要だ。
- ・私はカンボジアを3カ月に1回くらい訪ね、奥地のほうまで行って、その子達がどういう生活をしているかを見ている。そういう子達が日本にきているのかという感覚で、日本人と照らし合わせて考えられる行政マンがどのくらい



いるか。例えば県などで、もっと外国人を知る努力をしてみることが必要かもしれない。先ほど、松本委員が仰った日本人と素地が違うということは、現地に行ってもその子達がどんな生活環境にいるのか見ると分かる。三重県は来てもらう人を現地で育てても良いのかなと思う。例えば小学校にちょっと寄付をして教育をしてあげるだけでも良い。小学生に色々な国の言葉を教える学校はあるが、一番効果が出るのは日本語だ。何故かというと言葉ではなく、躰を教えてくれる。日本語の言葉を教える中に躰があるので、「ゴミを拾いましょう」という言葉を本当に行きでやってみたり、日本語を教える中で日本人は躰まで教えてくれるという。カンボジアの人達はそういう言葉を教えてくれる人達に対して見方も変わってくる。三重県と関連のありそうな地域に三重県職員が出向いて行って、そういう人達の姿を見て、多少なりとも教育に関わっていったらどうか。多分ここまでやっている自治体はないと思うし、踏み込まないと本当の意味での共生はできない。

#### 田中委員：

- ・環境庁において「地域循環共生圏」という多文化や継続的な成長、持続性を目指すモデル地域を指定することについて議論したが、三重県で目指しているものと凄く合致すると感じる。
- ・福岡で、日本のことを若い頃に学んで好きになって、ドイツでも有名な東大のような大学を卒業して日本に来たドイツ人とスペイン人と話したところ、仕事でステップアップしていこうとした際に、住宅が借りられないなど様々な問題があると話していた。彼らは最初、東京に居たがゴミゴミして暮らさず、自分が勉強していた環境系の仕事が北九州市にあったため、移住をしたとのことだった。外国人に来てもらい、文化の担い手になるような素晴らしい人材、日本を牽引していくような素晴らしい外国人が、三重県内で活躍できるような取組みをしていくのが理想である。
- ・また、三重県には外国人家庭の子どもが多いとデータでみられるが、学校に通わず、非行や犯罪の巣窟になるという課題もあると感じる。教育の方針で、日本語やスポーツをしっかり教え、「三重で育ててもらって有り難う」といった感じで育成されるような、そういう子どもを意識的に育てていくのが理想である。日本語教師が足りているかわからないが、三重で育つと日本語が本当に上手になる、日本の文化も理解できるような人が育つと良い。
- ・私の周りには自分の子どもを育て終えた50代くらいの実力のある大卒の女性が多くおり、人生100年時代と言われる中、子ども達を教える戦力になってもらいたいと考える。また、現在、日本から海外に出ていく子ども達も多くおり、日本語の先生が足りないという問題もあるため、日本語教師が例えば遠隔で海外にいる子どもとも触れられ、かつ日本でも教えられるような新しい教育が三重から出てくれば良い。
- ・高齢者について、現在高齢と言われている人は、急に人生100年時代と言われ

たため、「あ、どうしようか」と思っている。余生というものがなくなり、新たな目標やリセットが必要になっている。以前、データを収集したところ、人生100年時代に一番響いているのは20代の女性であった。100年と言われたから、20代のうちから100歳のことまで考えておこうと思っっていることが背景にあるのではないか。20代と高齢者と一緒に議論をして、一生だけでなく、二生、三生まで考えないといけない時代にきたため、新しいスタートが切れるような、生きがい新たに自分で意識するような空気づくりが必要である。

- 三重県の共生社会の戦略は良いと思うが、外から見て尊敬される、憧れられるような姿といった、外の目でみた魅力が加われば良い。
- サーファーをしながら他の仕事をしようとした時に、農業がマッチするという話があり、鎌倉や石川県にもサーファーをしながら農業をする人が結構いる。私の近いコピーライターが、「サーファーマー」という言葉を作り、それに憧れて若者が移住してくるようになった。三重の共生圏の中から、親しみや優しさ、さらにセンスが出てくると、良いものが拡散され、話題になると思う。
- 先ほど、すき間の話もあったが、様々な業種を巻き込みながら新しい社会で活躍する姿をイメージし、そのための人材育成が必要だと思う。三重県内には、地域再生大賞の話もあったが既に成果を出している企業・人が割といると思うため、頑張っている人がさらに支援されたり、サポートをしてもらえればさらに成果が出せるような企業・人をピックアップし、象徴的にコミュニティのリーダーにして、発信していくことが有益である。そこで大切なのが連携で、掛け算によるパワーがしっかりとすき間を埋められるような連携ができると良い。

#### **武田委員：**

- 意見を3つ申し上げたい。まず、1つ目として、今回のテーマである外国人、障がい者、シニアとの共生社会実現を考えると、地域それぞれの取組みが必要だ。ボランティアという視点でみると、県民意識調査で「ボランティア・NPO・市民活動を肯定的に捉えている」との回答は、60代や70代で増えており、特に60代でパーセンテージが上っている。これは、非常に良い結果だと思う。今のところ60代が28%なので、33%、つまり3人に1人がボランティアや社会活動に携わっていると言えるので、それを目標に取り組んでみたら良いのではないか。今は参加していなくても、興味はあるという潜在的な気持ちを持っている人もいる。前回も紹介したが、当社の3万人の生活者意識調査で調べると、60代で「今後、ボランティア等を通じて社会貢献したいか」という問いに対して、全国の23%に対して三重は35%と高い。潜在ニーズまで含めると、3人に1人は行っているか、あるいは今後関心があるということになる。ニーズにあったボランティア活動を提示できるように意識調査で「どんな活動をやってみたいか」を聞いてみると、より引き上げられるのではないか。
- 2つ目は、高齢者の社会参画については、「介護助手制度」が非常に良い。シ

- ニアも働けて、社会に役立っている生きがいも感じ、かつ、所得も得られ、それが地元にも還元され、人手不足も解消されるという、色々なところでWin & Winの関係になる。これは是非、全国に三重モデルとして展開して欲しい。
- ・「とこわか健康マイレージ事業」も非常に前向きで良いが、敢えて言えば追加で必要な要素が2つある。1つは「行動変容」だ。マイレージをあげるからこの運動に参加して下さいという意味での行動変容は入っているが、必要なのは、参加したことが本当に健康につながるかだ。マイレージが欲しくて行く方は、行って何もしなくても、もらえてしまう。2つ目の要素は「可視化」だ。本人がその運動を通じて健康になったということがわかると、それを実感するので、継続し、真の意味での健康づくりになる。もちろん最初の一步は参加することだが、究極のゴールは県民を健康にすることだとすると、その健康の「見える化」までできれば良い。当社ではモフトレと組んで、歩きましょうということだけではなく、個々人にとって個別にどんな運動をすると、効果があるかを提示して、それをやるとデータとして蓄積され、効果も見えるようになることをやっている。実際、市町村や都道府県と話をしたり、実証実験に入っているところもある。こうしたものを上手く組み合わせて、可視化と実際に健康につながる取組みが進むと、最後は、県民にとって人生の質の向上につながるのではないか。
  - ・3つ目は、今世界を見ていると、あちこちで社会の分断が起きている。トランプ大統領に目が行きがちだが、欧州でもかなり分断的な動きが進んでいる。地域レベルでも、共生という観点でしっかり見ていかないといけない。先ほどから出ている最低賃金も重要であり、そういったところで、担保し、冒頭に申し上げたボランティアとも組み合わせて、共生社会を作っていくといけない。人手不足の数合わせの受け入れは避けないと、社会の分断を招き、社会の健全性を崩しかねない。

#### **白波瀬委員：**

- ・共生という言葉は、我々の業界では早くから言ってきたが、やはり言うは易く、行うのは本当に難しい。今トランプだけではなく、欧州もというのがあったが、やはり日本は60年代、70年代に外国人労働者なしに、あれだけの成功をおさめたという成功体験が移民政策の歴史の視点としてある。その中で外国人労働ではなく、移民政策を正面切って、展開せずに良かった時代が凄く長かったが、気が付いたらそれでは立ち行かないという現実がある。
- ・現実と本当にどうしたら良いかということのズレが、今でもかなりある。労働者の底辺のところで人種間でのせめぎ合いがあり、時代とともに暴力とともにあるという事実があって、その中で紆余曲折しながら、人種のるつぼとしてのアメリカ社会を作ってきたが、その反動が今の時代だという感じがして、それが他人ごとではない現実がある。
- ・外国人労働者が背に腹を変えられないのも事実だが、凄く思うのはやはり中長

期的には教育の問題ではないかと思っている。それも、幼少期を含めた形の公的な教育の中で、この次の世代の子ども達を、国籍に関係なく育ててあげることが、次の世代の力になっていく。公教育の中で同じように言葉が喋れなくても、世話をしてもらったという経験は外国人だと凄く有り難い。その有り難い経験というのは次につながっていく。少数派というのは、色々なところが少数派で、女性も、障がい者も、外国人も少数派で、それがクロスになっている。だから連携なのだが、その優先順位をどこで付けてくれるかということだ。外国人ではなくて、女性が最初というのを言わなければならない時もあるかもしれないし、女性だけでするよりも外国人として門戸を開いたほうが、結果として男女平等というのも良くなると思う。その優先をリーダーが、どのようにつけてくれるかを最近悩みながら思っている。生活のレベルでは、国籍に関係なく、世話をした、一緒だよという、その実体験は絶対に無駄にならないので、そういう意味では、西村委員の仰ったように現場でそれをいかに積み上げていけるのが重要だ。

- 統計の読み方になるが、健康であるというのは高齢者にとっては絶対条件なので、健康であるかないかで、分母を同じにして、実際に働いている人と、働きたいという意欲を見ないと、この差は過小・過大評価されている。折角データを積み上げて、そこは丁寧に見る必要がある。特に高齢者は本当に差が大きくなる年齢層なので、そのラインを引いてそのボーダーで落ちる人と落ちない人の差が凄くある時に、政策としてどういう工夫をしたら良いのかと思っている。

#### **榊原委員：**

- 10月に熊野古道を歩いてきた。私は北の端で育ったので、南半分をこんなにきちんと歩いたのは生まれて初めてであり、この会議で皆さんが三重県は北半分と南半分では課題も文化も全く違うと言われていたことが実感として非常に分かった。実に魅力的な地域で、こんなに素敵な資源がこんなにあったのかということであらためて勉強することができた。今回の体験を「熊野古道と伊勢路を歩いて考えた」というコラムにして、当社のインターネットで発表させていただいた。
- 熊野古道を歩いて感じたのは、もっと外からの目線を入れるべきだということだ。素晴らしい景色と魚介の資源があり、温かい人達が助け合って暮らしてきた文化など良いところがたくさんある。しかし、少しずつ足りないところもある。例えば、JRが1時間に1本で、それを逃すと暗くて歩けない。駅から峠の入り口までつないでくれるものがない。峠の入り口まで車で行ったとしても、向こう側から帰る手段はどうするのか。こうした、つなぎの部分も外の人々の目線でやったら、連休の時だけでも地元の人達がボランティアで車を走らせてくれたりとかして、行けるようにするというようなことがあっても良い。折角、常に古道が綺麗であったり、食べ物が豊かであったり、景色がとっても良

かったり、とても良い古道センターがあったりというようなことがあるので、外の人が安心して行ってみようと思えるところまでもう少し足りない部分がある。富士山で考えると、8合目まで来ているのに、あともう少しという感じがした。外務省で広報文化を担当している友人と行って、彼女も凄く満足してくれたが、「外国人をもっと使えば良いのに」と言っていた。彼女の具体的な助言は、三重県にも地域に住み、日本語をある程度話し、三重県を愛している人が外国人でいるはずだから、ジェットプログラムのOBなどを上手く雇って、その人達と一緒に歩いてもらったり、空いている古民家を提供して住んでもらい、発信してもらいながら、どうやったら外国人が歩きやすいかというようなアドバイスしてもらってはどうかというものだった。和歌山県側の田辺市はその外国人を上手く使っていて、発信しているので、是非、三重のほうでもやったら良いのではないか。

- 熊野古道はスペインのサンディアゴのデ・コンポステーラと2つしかない道の世界文化遺産であり、もの凄い地域資源だが、三重県と和歌山県で色々なものが途切れている。県知事レベルでは既に連携の合意をしているが、県庁単位では進んでいない。例えば、熊野古道の地図も実は三重県で配っていただいた熊野古道の地図も県境までで相手の県の地図が入っていないということもある。一緒にWin & Winの関係を作りながら、色々と連携することで、地域の共生や持続可能性を一緒に高めていくと良いのではないか。少なくとも、県南のほうではこれが起爆剤になると思った。本当だったらもう少しでできることが縦割りで止まっていないかを外の目を使って見直すようなことを意識的にやって欲しい。実は県庁など行政の縦割り以外にも、JRの縦割りもあったりするので、それは3県と一緒にJRに言うことで、バリアは簡単に超えられると思う。
- 地域共生社会というテーマは非常に大事だ。ヨーロッパでは「インクルーシブポリシー」などと言われて、大事にされている考え方が日本語ではこの地域共生になるのだろう。日本でこういうテーマを議論する際に陥りやすい隘路はすぐに高齢者に視線が行ってしまうことだ。しかし、高齢者が将来不安をぬぐえないのは、自分達の後に続く世代がいなくなっているからだ。地域共生社会という発想をやるのであれば、日本では意識的に若者と子どもに軸足を置いた検討をすることが全世代の安心につながる。中高年世代以上は、女性と男性を分けて課題を設定して取り組む必要がある。そうしないと、男性中心の「どうすれば定年後も働けるか」という議論になりがちだ。教育を受けてきた中高年以上の女性の再活躍の場が非常に大事になってくるので、それを取り込む受け皿として、この地域共生社会を使うと良いのではないか。
- 県で物事を進めたり、変化を起こす際の具体的なゴールイメージを共有する時に、例えば孤独死ゼロを目指すというようなイメージ設定の仕方もある。日本で社会的課題になっているものには、孤独死の他にも、引きこもりや若年の自殺、最近では毎日のようにメディアを騒がせている虐待死などがある。東京都

立川市の大山団地では、自治体、新聞の宅配、隣近所の助け合いなどでシステムを作り、数年前から本当に孤独死ゼロにできている。虐待の死亡ゼロもフィンランドのネイボラという妊娠期から全員を支援する仕組みで可能になっている。色々なグッドプラクティスを取り入れることで実現は可能であり、そういう目標を立てた上で、「誰一人取り残さない」というのを、リップサービスではなく、やるというメッセージの出し方もある。

- ・外国人との共生については、インクルーシブ保育はやる価値がある。インクルーシブ教育というと、小学校以上のイメージになるが、実は保育が一番やり易い。保育は生活なので、学習の到達目標に向けた組み立てをしなければいけない学校と違って自由だ。そこで、言葉や生活文化やバックグラウンドの違う子ども達と、発達障がいなど医療的な兼ね合いのある子ども達も一緒に包摂しながら、地域を作っていく。保育の良いところは、子どもだけでなく、親も自動的に巻き込めるところだ。三重県はこれから保育園、幼稚園、子ども園が定員割れしていく。そこをつぶすのではなく、もっとゆったりした人員配置に替えていきながら、インクルーシブ保育の実践をやるべきだ。職員研修、教育ツール、プログラム作りなどは公立の保育園で実験的にやり、そのノウハウを地域で皆で共有していくやり方もある。
- ・高齢者の力をどのように社会で活かしてもらうかについては、福井県のマイスター制度が凄く良い。教師、保育士、理学療法士など色々な専門を持っている人達をシニアマイスター制度としてボランティア登録してもらい、その一覧を行政が管理・公表する。NPO、企業、勉強をしたい人などの要請で、ボランティアとして派遣されるという、とても良いつながりづくりをしている。そういう人材のバンク、地域資源のバンクを作り、行政がそのコーディネートをすると、これから高齢者の活躍を増やしていく意味でも良いのではないかな。

## フリートーク

### 藤波委員：

- ・最近、私が知った言葉で「愛着障がい」という言葉がある。それは大きな意味では発達障害なのだが、特に2歳以下の時に適切な親の関わりを得られなかった子どもが感情のコントロールができなくなるという障がいだ。幼少期に愛情を受けずに育った子どもの場合、成長しても、歳相応の社会性が育たないというものだ。これから外国人が増えて、子どもの生活を考えていくと、保育園、小学校、中学校の中できちんと社会に認められるという体験を積み重ねなければいけない。それが地域づくりの中で大切になると思う。

#### **白波瀬委員：**

- ・外国人も幼少期から日本に来ると、本当に完全な日本語を話せる。ただ、親との関係が非常に難しい。スタッフ自体は子どもとの関係で、例えばどういうものを食べるとか、いつ休むとか、それぞれの国の文化に入り込んでいる。その中でファシリテーターというのが重要になる。今まで、小学校では保健の先生とかが凄くないがしろにされていたが、カウンセラーというのは身体的とか心の中だけではなくて、将来のキャリアの話も含めて凄く重要になる職種だ。幼少期であればあるほど、子どもは日本の言葉とある意味の文化で変わってくる。子どもはどんどん変わるが、その間でいつも難しいと思ったのが、親との関係だ。そこで、もの凄く文化の違いが出てくる。

#### **藤沢委員：**

- ・外国人について、海外でも問題が起きているのは来た人達、いわゆる第1世代だ。第2世代では基本的に問題は起きていない。第1世代で問題が起きないようにするには、日本人から見た時に、外国人が自分達の権利を脅かしているとか、仕事を取られてしまうとか、そういったことが起きないことが大事だ。都市部に外国人が集中するというのも問題だ。三重県には、外国人の採用人数と同時にその地域の有効求人倍率を業種別で発表していただきたい。有効求人倍率が非常に低いのに外国人に集中しているというのはおかしな話であり、そういう数字を発表するだけでも、ずいぶんアンバランスなのが分かる。そういうことを「労働市場テスト」という形で、国で導入しようと提案していたが今回、見送られたので自治体でどうかと思っている。

#### **白波瀬委員：**

- ・今のトランプ政権の背景も、結局、労働者が現場で身を持って、自分達は外国人に仕事を取られているという。本当は違うのかもしれないが、それが積み重なっている。その実感といつもそれがズレている。

#### **西村委員：**

- ・実態を把握する時に、意外と丸めた言葉で全部やってしまう。時に、田舎でよくあるのは、不便だから皆出て行くというものだ。不便というのを、もう1回詳しく見ましたかということだ。何が不便なのかということ、もう少し細分化して見ていくと、都市部の不便と田舎の不便は違う。最近、こうした小さな不便があるだけでも、それが自分の意識の中で全体の不便になってくるのが起こる。いつの間にか、それが集合すると、もの凄く不便なところなので、だから凄くコミュニティバスを作らなければいけないとか、少しギャップが出てしまう。本当に直さなければいけない不便が何かということ、きちんとして見ることが、この地域共生社会の中で必要ではないか。そこには、行政がやるべきこともあるが、隣のお姉さんや近所の若い子がやるべきこともあるかも

しれない。民の業としてやってもできることもあるはずだ。

**松本委員：**

- ・最近よく売れているイェール大学のシェリー教授が書いた「死」という本を読んで共感した。「長生きすることは必ずしも良くない」という言葉があり、それはまわりがいなくなったりするからで、楽しく生きられる間は生きたいと思っているのだ。その間は何かやれることがあったらやりたい。若い頃は早く仕事を辞めたいと思っていたが、高齢になったら、何かできることがあったらやりたいというような気持ちに変わった。
- ・三重県は離れれば離れるほど、良いところだと感じている。三重県の強いところは住みやすいところであり、気候も自然も良く、コストが安い。そういう意味合いでは、強みがあると思う。

**宮崎委員：**

- ・同級生と話していると、フローのお金が入ってこないことを凄く不安に感じている。ストックは退職金をもらうが、それしかないと寿命が20年延ばされたら、皆、何も買わない。フローのお金が入ってくるのは安心だが、それがなくなりストックを取り崩していくと、凄く寂しい人生と気付く。仕事をしたいというのは、確かに仕事に対する意欲もあるが、何とかフローのお金を稼ぐ方法がないかというのもある。例えば、5千万円、1億円あっても、何も入ってこないと減っていく。寿命が長くなればなるほど、凄く不安になるというのは同窓会に行くとよく分かる。

**速水委員（座長）：**

- ・60歳で起業する人達の気持ちというのは、多分所得にもあると思う。やる気ややりがいという言葉で片づけるのではなく、やはり所得の維持というものもある。
- ・外国人については、その子ども達の教育がとにかく重要で、二代目はより良き三重県人になりたいと思う人達を育てる環境をどう作るかだと思っている。
- ・今夜間中学の生徒の7～8割は外国人だという話を見聞きする。ある県立高校の外部評議員をやっていた時、夜間高校を何度か見学したこともあるし、私の知り合いも夜間高校を出て活躍している人もいる。そういう本命のルートから外れた人達を、きっちり面倒を見ていくことは公の仕事としてあるのだろう。
- ・共生社会では、公がやるべきこと、民間がやるべきこと、そして民間がやるべきことを公がどうやってサポートしていくかを考える必要がある。民間がやるのは、1つは活動そのものであり、もう1つは民間の発想が大事だということがある。そのサポートをどのようにするのかも、とても大事だ。今後、県はそのあたりを議論していかなければいけない。



- ・実は私の長女はドイツ人と結婚しているが、最初、相手が日本に来た時に日本のことが全く分からなかったので、娘が彼のもとに来た手紙を重要な手紙か、捨てても良いかをサポートしていた。そのような基本的な生活について、外国人に対してサポートする仕組みを作っていく必要がある。例えば、来たものを全部、写真に撮って送ったら、捨てても良いか、きちんと返事をしないとイケないかをきちんと選別してくれる人がいると助かる。機械でできることも結構ある。例えば、最近、もの凄く自動翻訳機が良くなってきており、外国人に対しては片言でも良いから翻訳されるだけで、窓口でどうにかなる。市町村の窓口には、必ずそれを置くような、ちょっとしたサポートをさせることで、住みやすくなる。小さなことから、やれることはやっていくという発想がある。例えば、高齢者に徹底してタブレット教育をやり、買い物などそれで処理ができるものはやっていく。地域の商店とつなげて、地域の商店が配達してあげるような仕組み作りも良い。
- ・三重県でも苦勞していると思うが、シャープが雇止めしたことで多くの失業者が出たが、その人達の面倒を積極的に見ていくことで、やはり三重県は良いと思ってもらえるようにしていかなければいけない。
- ・高齢者に関しては、西村委員からも出た高齢者の足の問題は重要だ。車に乗れない高齢者は近くに行くのも、バスが必要だ。市町村が合併し、近くにあった役場が車で30分近くかかるので、バスや電車を乗り継いでとなると、これは1日仕事になる。そういう状態になった時でも高齢者に免許を返納しろとなりかねない。自動運転が良いのか、特区でUberのような仕組みを取り入れるのか、ライドシェアのようなものがあるのか、色々あると思うが、やはり年寄りの足は、特に南部や志摩などでは真剣に考えないとイケない。行政が考え、提案をして、市町村が実行していかなければいけない。
- ・車ではないが、高齢者のやる気で一例を挙げると、私の住んでいるところでは高齢者がクラブを作っていて、面倒なことを何でもやるということで葬儀屋をやっていた。大変、面白く、何人死ぬかというのを全部統計として、その中の何割を自分達のターゲットにしよとか言っている。そういう時に何らかのサポートがあると凄く元気が出る。このように公、民間、ちょっとしたサポートをお願いしたい。

### 鈴木知事：

- ・今日はあまり障がい者の話はでなかったが、共生社会全体でこういうことが大事だと思っていることに、ステップアップカフェ「C o t t i 菜」の取組みがある。これは障がい者がステップアップしてだけでなく、地域社会全体がステップアップしていくものであり、障がい者を理解し、障がいの有無にかかわらず、共生していくために、地域社会全体がステップアップしていこうというカフェだ。障がいを持つ当事者から皆さんが学んでいく「ステップアップ大学」で既に30回くらいの講座を行っており、この3、4年で10万人に来ても

- らっている。先ほど、西村委員から「外国人を知る努力」という話が出たが、こういうことが共生社会を創る上で大事なのではないか。
- 「すき間」の議論と「やれることをどんどんやる」という議論があったが、三重県は外国人の児童虐待相談に対して、24時間電話サービスを通訳で対応するという体制をとっている。普通、全国の児童虐待対応は電話が来ると、翌日に行って対応するが、三重県では電話があった瞬間に電話通訳を切り替えて、24時間すぐにリアルタイムで虐待相談を受けることができる。これは、「外国人×児童虐待」ですき間に落ちそうなことをやっている。やれることをどんどんやっていきたい。
  - 最後に「空飛ぶ車」については、多分、三重県は全国で一番最初に実証実験をやることになると思う。今、国土交通省と経済産業省の協議会で、手を上げているのは東京、大阪、三重、福島だが、福島は作るほうをやり、三重は離島、中山間地域を中心に飛ばすほうになる。多分、三重と福島が協力して、三重で一発目にやるのではないかと思う。
  - 最後にお願いだが、実は委員の皆さんの任期が今年度で満了する。それぞれ学校や組織などの手続きもあると思うが、現体制で会議を継続させていただきたいと考えているので、是非、ご理解とご協力をお願いしたい。

以上